

朝鮮通信使が見た日本

文 慶喆*

Japan seen by "Chosen-Tsushinshi"

MOON Kyungchol

1. はじめに

朝鮮通信使は、1607年「国交回復兼刷還使」の第一回目から始まり、1811年第12回目の「徳川家斉の襲職祝い」まで約200年間に渡り続いた世界的にもあまり前例のない日本と朝鮮との間の公式的な交流である。勿論、この通信使という名前の記録は室町時代にもあったが¹⁾、定例的に行った江戸時代の「通信使」を「朝鮮通信使」と呼ぶのが最も一般的である。

この朝鮮通信使の始まりは、「国交回復兼刷還使」の名前の通り政治的、外交的問題の解決が目的であった。しかし、次第に「文化使節」としての役割に移り、日本と朝鮮の両国間の友好親善を図ると共に平和関係構築に大きく貢献したことになる。

江戸時代最初の朝鮮通信使である「国交回復兼刷還使」は、豊臣秀吉による朝鮮出兵の結果断絶されていた日本と韓国の間の国交回復が最大の目的であった。これには豊臣秀吉死後新しい権力者になった徳川家康が、幕府の立地を固める為にも朝鮮との関係回復は必要不可欠であったのである。鎖国時代においての日本にとって、朝鮮は正式な外交関係を持つ唯一な国であり、朝鮮側

*東北文化学園大学総合政策学部教授 e-mail:kcmoon@pm.tbgu.ac.jp

1) 室町時代の通信使は、1412年、1429年、1439年、1443年、1460年、1479年の五回が記録されており、人員も50名から100名位の規模であった。

からの徳川幕府の権力の承認は内治の上でも重要な意味を持つことになる。

朝鮮側も豊臣秀吉による朝鮮出兵の辛い経験があったので、常に日本の意中を探る必要があり、また日本の進んだ文化にも強い関心があった。文化的な面においては日本側も朝鮮が優位性を持つものに対して受け入れを望んでいた。

このように両国における必要性があり、国交回復の動きは速く進んだ²⁾。勿論、国家間におけるプライドの問題もあり最初は難題も多かったが³⁾、大局的な観点から知恵を絞り無事に解決した。

両国間の交渉に当たった人達とその間に立って献身的に働いた対馬藩の努力により、第一回目の朝鮮通信使が早くも1607年日本に渡ってきた。第一回目の規模は467名で、その後302名（第三回目）から497名（第八回目）までの大集団であった。これに日本側の各藩から集められた1500人規模の人員が加わり、大行列を成して大阪から江戸まで練り歩くことになる。この行列の様子は描かれた絵が残っており、駕籠や馬に乗った人、大きな旗を持った人、楽団や踊り手まで加わり、鎖国時代において外国に接することのできる珍風景を演出した。

朝鮮通信使の旅は長くて、命がけの険しい道程だった⁴⁾。朝鮮の漢陽を出発し、陸路で釜山に着き、釜山からは船に乗り日本に渡るのであった。第一回目の1607年の例を見ると、1月12日漢陽の王宮前から出発し釜山に到着。釜山を2月29日出発し⁵⁾対馬に到着⁶⁾。対馬を3月21日に出発し4月8日に大阪到着。大阪を出発し、4月12日に京都によって江戸には5月24日に到着する⁷⁾。漢陽を出発し江戸まで片道だけでも5ヶ月に及ぶ長旅だった。海路では天候によって何日も足止めさせられたり、補給や休憩の時間も必要だった。

朝鮮通信使の一行が日本の対馬に到着してから、江戸までの主な経由地は

- 2) 交渉のため第一回目の派遣は1604年6月、松雲大師を中心に送り、京都で徳川家康と秀忠に会い、翌年5月に朝鮮に帰国した。
- 3) 朝鮮側が要求したのは、徳川將軍側から朝鮮に講和の国書を先に送ることと王陵盜掘犯の送還だった。
- 4) 1643年には訳官船遭難事故があり、約180名が犠牲になったこともある。
- 5) 釜山では渡航の為の準備で約一か月要したという。また、船が出港出来る潮の条件や風等も影響した。
- 6) 釜山から対馬までは天気さえよければ翌日の朝方には着いたという。
- 7) この時代においては朝鮮暦（中国暦）と日本暦の間に若干差があったようであり、これは朝鮮暦である。

次のようになる。

対馬（佐須奈⁸⁾、鰐浦）⇒ 対馬（厳原）⇒ 壱岐 ⇒ 唐津 ⇒
 藍島（相ノ島）⇒ 赤間関（下関）⇒ 室住 ⇒ 上関 ⇒
 鎌刈（蒲刈）⇒ 輪浦（輦浦）⇒ 下津 ⇒ 牛窓 ⇒ 室津 ⇒
 明石 ⇒ 兵庫 ⇒ 大阪 ⇒ 淀浦 ⇒ 京都 ⇒ 大津 ⇒
 草津 ⇒ 守山 ⇒ 佐和（彦根）⇒ 大垣 ⇒ 名古屋⇒ 岡崎 ⇒
 新井 ⇒ 浜松 ⇒ 富士下 ⇒ 駿府 ⇒ 小田原 ⇒ 品川 ⇒
 江戸 ⇒ ☆日光⁹⁾

また、従事官の書記であった「金仁謙」が記した日記『日東壮遊歌』によると、1763年9月に漢陽を出発し、対馬の府中（厳原）、壱岐、下関、瀬戸内海、大坂、京都、彦根、名古屋、駿府、三島、小田原、藤沢から江戸に到着したのは年が変わった翌年の1764年3月18日であった。江戸で一か月程滞在し、漢陽に帰還したのが1764年8月5日なので約一年間に及ぶ長旅であったことが分かる。

朝鮮通信使が通った道は以上から分かるように日本全国とは言えないが、対馬から日光まで主な街や景勝地が網羅され、沢山のことを見て沢山のことを経験し、多くの日本について理解されたと考えられる。

このような体験は詩や日記として書き残され、今にも殆どが伝わっている。この貴重な遺産は日本と韓国のみでなく世界的な遺産としての価値が認められ、ユネスコの「世界記録文化遺産（Memory of the World）」にも登録されている。申請したその内訳は日本側の48件209点、韓国側の63件、124点で、合計111件、333点にも上る。

朝鮮通信使が残した記録は、この世界記録文化遺産に含まれているものはその一部に過ぎなく、それ以外にも膨大な量に上り、後に纏めて編纂されている¹⁰⁾。

その『通信使膳録』をみると、日本からの通信使派遣に関する要請書簡、通信使派遣の準備と手続き、随行員の職位と名前、日本に伝えた礼物の品目、通信使の報告内容と日本からの返礼の品物等が書かれている。

8) 佐須奈に館所ができる前は鰐浦の一か所だけ。

9) 「日光」まで行ったのは十二回中三回だけであった。

10) 『海行摺載』

この朝鮮通信使の受け入れには日本側の財政負担も相当だったと考えられる。朝鮮通信使が通る主な経路で景色の良いところには新しい客館を建て、毎日の食事の為に『海游録』の記録を見ると、1日300羽の鶏、約2000個の卵が供給されたと書いてあるので、その規模の一端を伺うことができる。この予算は正に徳川幕府の一年の予算に匹敵するとも言われている。

このような莫大な予算を使い、また朝鮮から選ばれた通信使はこの命がけの長くて険しい長旅で何を見て何を感じたのか興味津々である。中には嫌々と思っている人がいる反面、異国の文化に憧れて進んで参加した人もいる。中国の「燕京使」¹¹⁾とは違い宿泊地の制限や自由行動への制約はあったものの、一般の人との広範囲な交流は可能であった。至る所には待ち受けている人が「人山人海」を作り、様々な人との交流も行われた。また、日本の自然景観から貨幣経済や商業、街の発展、印刷や出版業の繁盛、科学技術の進歩などには嫉妬心と共に羨ましがる場面にも沢山遭遇する。

しかし、制限された旅人としての限界から、短編的な面だけ見たり、あるいは誤解したりする場面も沢山見られる。

本稿では朝鮮通信使が異国の日本の地で何を見て、どのように感じたかを、当時通信使として来日した人達が残した日記などから考察してみる。

2. 朝鮮通信使が見た日本

2-1. 朝鮮通信使が見た日本の自然景観

朝鮮通信使が日本に来て最初に目にするのが当然ながら自然景観である。また、朝鮮通信使で選ばれた人達は日本に来る前から、「琵琶湖」と「富士山」を見るのをとても楽しみにしていた。朝鮮は火山がないので大きい湖も富士山のような高い山がなかったからである。また、対馬から海路で壱岐島、藍島、瀬戸内海の風景は旅人の心を掴むのには十分だったと考えられる。このような景勝地では文化的優越性を示したいと躍起になっていた朝鮮通信使が歌った漢詩などが多く残されている。

11) 同時代に日本の12回に対し、「燕京使」(燕京は今の中国の北京)は公式訪問494回、非公式的訪問を含めると600~700回目で上と言われている。

その中でも、『癸未隨槎錄』¹²⁾ (1763)には、日本の素晴らしい景勝地について次のように挙げている。

- ①「西京」¹³⁾の雲を突き刺さって立つ五重の塔
- ②「彦根峰の茶屋」の名泉水と奇岩奇石
- ③「江尻清見寺」の莊嚴と絶勝
- ④ 森島から眺める「富士山」の盛夏の雪
- ⑤「箱根峰の茶屋」の曲水
- ⑥「森島茶屋」の五色鯉
- ⑦ 吉原の「臨海亭」絶景

などなどすべてが絶景で、船を止めてもっとゆっくり鑑賞できないのが「可惜可惜」と書いてあり、日本の自然景観を讃えている。

1711年、第8回目朝鮮通信使として参加した「李邦彦」¹⁴⁾は鞆の浦の福禅寺¹⁵⁾に設けられた客館に泊まることになった。李邦彦は福禅寺境内にある「仙酔島」の風景に感動し、「日東第一形勝」(日本で一番美しい景勝地)と褒め称え、その書を残した。また、1748、年第10回目通信使の正使として参加した「洪啓禧」¹⁶⁾はここにある迎賓館の建物を「対潮楼」¹⁷⁾と名付け、その額の書は洪啓禧の息子で一緒に参加した22歳の「洪景海」が書いた。

朝鮮通信使の迎賓館としても使われていた清見寺には、富士山の絶景を歌った詩や庭園の滝、松や芭蕉、臥龍梅、海原や空の景色を絶賛する詩や扁額が数多く残っており、ユネスコの「世界記録文化遺産」にも指定されている。

朝鮮通信使の最終目的地は江戸であったが、1636年第4回目通信使の時に初めて日光¹⁸⁾遊覧に誘われる。しかし、通信使三使の使行録には帰国後に追及される責任を恐れて、この計画には批判的な意見を示している。この記述

12) 一卷一冊三十八章。作者未詳。

13) 京都の地名

14) (1675年～?年) 李邦彦は通信使三使の一つである従事官として参加した。

15) 広島県福山市鞆町にある真言宗大覚寺派の仏教寺院。950年頃創建されたという。

16) (1703年～1771年) [徳川家重]の將軍襲職の祝賀のための朝鮮通信使正使として参加した。

17) 「対潮楼」は1690年朝鮮通信使の迎賓館として建てられた。

18) 当時江戸から日光までには、春日部一拍、小山一拍、宇都宮一拍、今市一拍で、往復一週間もかかったという。

は三使の協議により意図的に記録されたと考えられる。これは帰国後の責任追及に対する対策でもある。最初の日光遊覧はこのような葛藤¹⁹⁾があったが、実際に行ってみての感想はとても好意的である。その中身を見ると、千年を超える杉並木の美しさや万尺にも及ぶ滝の荘厳さにその感情の一面を表している。この感情は1643年第5回目、1655年第6回目に引き継がれ、積極的に日光の自然を堪能するようになり、その美しさを詩でよく表現している。『東槿録』にはその自然の美しさを、『海槿録』には東照宮の建物の華麗さにも言及している。銅で覆われた屋根や黄金で飾られた建物の規模、彫刻の精巧さは眩しいほどだったと絶賛している。

このように対馬から日光まで至るところの日本の自然景観を見た感動は詩で表現され、今にも数多く残されている。『日東壯遊歌』²⁰⁾にも摂津、京都、大江、彦根、西京の風景について詩っている。

このように日本の自然景観を堪能し絶賛する一行で、中には「富士山」と「金剛山」との比較論争のようなものも起きた。朝鮮通信使の中には朝鮮の自然景観も日本に劣らないという自尊心が働いたからだと考えられる。筆談による方式で、代表的な論争が1711年第8回目の時の「岡島」と「洪舜術」との対決が有名である²¹⁾。岡島が日本の風景を自慢し、洪舜術に朝鮮や中国の自然を聞くとところから始まる。これに洪舜術は富士山も名山ではあるが、金剛山の繊細な奇岩奇石や多彩な美しさに比べて富士山は及ばないと答える。

このように抽選通信使は多忙な日程の中でも、日本の親善景観を堪能し、それを才良として日本人等の多様な交流が行われていたことが分かる。

2-2. 朝鮮通信使が見た日本の歳時風俗

朝鮮通信使が日本に来て興味深く見たものの一つが日本の歳時風俗である。何故かという朝鮮は儒教を崇拝し²²⁾、礼儀作法を重んずるからである。

朝鮮通信使が記録した日本の歳時風俗の中で一番多いのが「お正月」と「お盆」である。

19) 東照宮参拝において朝鮮式にすべきか神道の礼儀に従うかの激しい論争があった。

20) 1763年第11回目の朝鮮通信使の従事官の書記として来日した「金仁謙」の旅行記。

21) 日本で刊行された『鶏林唱和集』に収録されている。

22) 当時朝鮮は、儒教の中でも特に「朱子学」に偏っていた。

勿論、朝鮮にもお正月があり、また日本のお盆とは違うが、それに値する「秋夕」²³⁾という祭日があるからである

朝鮮通信使の道程は長くほぼ一年間に上り、日本の歳時風俗をどこかで直接あるいは間接的に経験したと考えられる。また、異国で迎えるそれぞれの節句は感慨深く、強く印象に残っていたに違いない。しかし、朝鮮通信使が経験したこの「お正月」と「お盆」は期待していたのとはかなり違うものだった。

先ず日本のお正月を朝鮮通信使はおのように迎えたのか。頭の中では朝鮮の「元旦」を浮かびながら新年を迎えたに違いない。そのため、自分の故郷を離れて異国である日本でのお正月の体験は特別で、感慨深いお正月だったと考えられる。このように興味津々と日本のお正月の朝を迎えたが、一番びっくりしたのはその静けさだった。朝鮮のお正月は新年を迎えた喜びで騒ぎ、また祭礼²⁴⁾や墓参りの準備で忙しいのに対して、日本人は家から誰も外に出て来ない。また、自分達に新年の挨拶に来ることもなく、誰の家からも招待してくれることもなかった。不思議に思うのも当然である。朝鮮ではお正月の朝、祖先の霊に「茶礼」を行い、恒例のお正月のお雑煮を食べた後は、その日の内にお墓参りや親戚の家に新年挨拶²⁵⁾に回るのである。

不思議に思った朝鮮通信使は、日本は仏教の国²⁶⁾なので、お正月の朝は家の中で座禅でも組んでいるのだと勝手に思った。通信使の人達は、近所の家を回ってみた。静けさの中でたまに贈り物を持って来る人がいる。その人も玄関から直接訪ねて会って新年挨拶するのではなく、勝手口とその手土産だけ置いて帰る。そのため、誰か来たか分からないので、勝手口の横には筆と紙があり、そこに記帳するのである²⁷⁾。このように通信使が初めて体験する異国のお正月は、想像以上に理解不能であった。このような誤解からお正月に日本側の人が新年の挨拶に来ないことに、一層寂しさを感じる²⁸⁾。

通信使は、お正月は新年の初日だけだと思ったら、その感覚にもかなり違

23) 「中秋の名月」に当たる。

24) 祖先を祭る「茶礼」を行う。

25) 新年挨拶を「歳拝」という。

26) 朝鮮は当時、儒教が国教のようなものであった。

27) 任統の『丙子日本日記』

28) 姜弘重『東槿録』

うものがあつた。例えば、金世濂の『海槎録』²⁹⁾によると、お正月が終わり、直ぐ次の日に江戸へ出発しようとした。この一行がお正月を迎えたのが神奈川であつたため、目的地の江戸は鼻の先にあるからである。しかし、元旦の十五日間以内は旅に出ないのがこの国の風習だと言い、貴賓を旅に出させるのは礼儀ではないと言われる。大君³⁰⁾は通信使一行が江戸でお正月を過ごさせるよう招待したくないのではなく、お正月の十五日間は旅に出させないのが日本の礼儀だと説明された³¹⁾

任統の『丙子日本日記』にも、“お正月には家の門を閉め、十五日までは仕事も控える”，金世濂の『槎上録』にも“家々は門を閉め、町を歩く人もいない、十五日までにはお祝いことも避け、仕事もせず”と書いてある³²⁾。これは一般の人の風俗で、商人の場合は、京都では三日間、江戸では一日間、店を閉めるのが普通だったとある。

また、朝鮮通信使が日本のお正月の記述で一番注目するが正月飾りである。この飾りは朝鮮では見たことがなかったので、とても気になったと思われる。特に、「門松」と「しめ縄」は多く記述されている。朝鮮通信使が初めて目にしたこの門松を、姜弘重の『東槎録』には“家々の門の前に松竹と雑草をかけ、まるで我が国の厄払いに使う飾りに似ていて、中華の真似であるに違いない”という見方もある。金世濂の『海槎録』には、“昨日³³⁾から見ているが、家の前に竹の枝を束ねず挿して”とある。また、『東槎録』にはその上に蜜柑一個を付けたとしている。任統の『丙子日本日記』にはこれよりもっと詳しく、“松と竹の束ねた真ん中の周りに藁で結び、そこに蜜柑一個と紙銭を数か所に付ける”となっている。これを総合的に見ると、形はそれぞれ違うものの、材料としてあるのが「松」、「竹」、「雑草」、「藁」、「蜜柑」、「紙銭」などである。これは地方によって、あるいは各家の家風によつての違いかも知れないと考えられる。また、このような短編的な記述だけでは、その形を描くのは難しい面もある。勿論、朝鮮通信使の人達が見たこの門松について名前も知らなかったようで、何も書いていない。また、何の目的でしたのかも知らなかったようである。

29) 1636年第4回目の通信使

30) 朝鮮通信使は「將軍」を「大君」と呼んだ。

31) 金世濂の『海槎録』

32) 『海行摠載』

33) 「大晦日」と考えられる。

この門松と共に通信使が目に見ているのが「しめ縄」である。門松の中にはしめ縄と一緒に飾ったものもあり、あるいは別の場所に飾っているのを見たものもある。しめ縄には「紙銭」のような白い紙をつけたものもあった。あるしめ縄には、蜜柑や「四手」という名前の「切り取った白い紙」をつけたものもあった。このしめ縄についても、人によって記述が異なり、縄には藁をつけたり、あるいは蜜柑をつけたりという記述があり、それぞれ異なる。

このように朝鮮通信使の初めて見たお正月についての記述はとても面白いが、民俗学的な立場からの検証は必要になると思われる。それと共に日本の文化を知っている人なら誰もが分かるはずの日本のお正月文化について朝鮮通信使には見落としていて、見ていないのも沢山ある。例えば新年の挨拶として行う「名刺受け」³⁴⁾と「門札」³⁵⁾のようなのも間違って誤解している。なぜならこの門札に関しても朝鮮通信使は直接経験したことがなかったのである。

朝鮮通信使は外見的な日本のお正月は見たものの、内面的な面においても、また家で行う伝統行事についても見る機会が殆どなかったようで「神棚」や「鏡餅」、「宝船」のような記述は見られない。「お歳暮」、「お年玉」、「おせち料理」などについては若干の記述があるもののあまり興味がなかったようで、詳細は見当たらない。食べ物についても同じで、1月一日に「酒」と「餅」が送られて通信使一行に配った位しか記述は見当たらず、この食べ物に関してもあまり興味がなかったようである。

朝鮮通信使による「お盆」の体験は『扶桑録』など合計8か所に上るが、日程の都合上体験場所は対馬、赤間関、江戸などに限られる。また、お盆の性格についての理解もなかったようで短編的な体験の記述に止まる。これはあくまでもお客様の立場としての体験なので、その行事に関する詳細は見られない。江戸では「中元」³⁶⁾の時期に3日間休みがあり、官員から「梨」と「葡萄」が送られた。1748年第10回目の通信使の時、赤間関では盆の祝日に砂糖や乾物が送られた³⁷⁾。などと書いてある。期間も15日と16日とあったり、14日15日とあったり、あるいは14日から18日まで長く、人によって期間も違っていた。

34) 朝鮮通信使が泊まった神奈川では「字札」という。

35) 沢山の人と新年の挨拶を交わすため家には入らず門の前で行う。この時主人は家の前に米、餅、昆布、干し柿、海老、イクラ、栗などを置き、お客様が来るともてなした。

36) 『癸未東槎日記』ではお盆を「中元」（7月15日）と表記している。

37) 『奉使日本時見聞録』

これは休みの期間からお盆の時期を推測したと考えられる。その中でも「15日」³⁸⁾がメインであることは理解していたようである。特に対馬では長く滞在した³⁹⁾ために一番詳しく書いてある。対馬では、お盆の飾りとしてお墓に付ける灯を見ている。15日の夜には家の中にもお灯を付けている。また夜には人々は灯を持って山に登る⁴⁰⁾。この「盆灯」を朝鮮通信使は「花祭り」⁴¹⁾にかける「蓮灯」と例える。また、対馬では盆踊りを見ている。食べ物に関しては、対馬の人はお盆期間中肉類を口にしないと記述している。このように朝鮮通信使は日本のお盆について限られた体験と理解しなかったことが分かる。

お正月とお盆以外に、朝鮮通信使が見た日本の歳時風俗には「端午の節句」と「6月の氷祭り」がある。日本の端午の節句を体験した人は、菖蒲酒をご馳走になりその感動を詩で表している。これを見ると日本の端午の節句には菖蒲酒を飲む風習があり、朝鮮の風習との同一性を感じたと考えられる。しかし、幟には朝鮮と異なり異質を感じた。

特異なのは「6月の氷祭り」があり、1607年の記録には6月の初日に暑気払いのため氷を食べる習慣があると書いてある。夏の氷は当然珍しいものであり、強く印象に残ったと思われる。氷について聞くと、12月に富士山で作ったものを持って来ると言う⁴²⁾。この氷は大変貴重なもので、これを食べられる人は天皇か将軍位の人であり、一般の人は12月に氷のような餅を作って置き、氷祭りの時にこれを食べる。この「搔き餅」を通信使は朝鮮の「きな粉餅」と形が似ていると見ている。しかし、きな粉餅は非常に柔らかいのに対して搔き餅はかなり硬いと見ている。この6月の氷祭りについても、1719年第9回目の朝鮮通信使の「製述官」の役員として参加した申維漢の『海遊録』の記述以外は主に間接的な経験の記録である。

2-3. 朝鮮通信使が見た日本の食

朝鮮通信使が日本に来て一番先に接するのが食文化である。しかし、朝鮮通信使の食の接待においては細かく決まりがあった。特に、1682年以降につ

38) 朝鮮にも7月15日に「百中」という仏教行事があった。(孟蘭盆節)

39) 朝鮮通信使が長く滞在できたのは、対馬、大阪、江戸の三か所だった。

40) お盆の送り火と考えられる。

41) 4月8日のお釈迦様の誕生日。

42) 朝鮮通信使は「氷室」について知らなかったようで、富士山から直接持って来ると誤解している。

いては主に接待に関わった対馬藩の『宗家記録』があり、その詳細を見ることができる。これによると、通信使の身分によって膳立ては違ったようである。1682年往路においては、三使・上上官には、朝食：三汁十五采、昼食：五五三善、夕食：七五三善・三汁十五采であった。それが上官⁴³⁾になると朝食：二汁十采、昼食：二汁十采、夕食：五五三善。中官⁴⁴⁾は、朝食：二汁七采、昼食：二汁七采、夕食：二汁八采。下官⁴⁵⁾は、朝食：一汁四采、昼食：一汁五采、夕食：一汁六采であった。勿論、この膳立ては時代によって若干の違いはある。

また、この接待においては食品以外に銀が支給された。この銀は、街で自由に使い食(酒)を解決した。また、この通信使一行には「刀尺」と「熟手」が加わり、食品の材料を提供すると朝鮮式の料理を作ることもあった。材料は五日ごとに支給され⁴⁶⁾、特に米は十分な量で江戸に着くと相当余る程であった。米の他に、酒、醤油、清醬、塩、油、鶏肉、卵、雉肉、うずらの卵、鰯、干し鯖、河豚、豚の足、椎茸、わかめ、芹、ニンニク、ネギ、生魚醬、韭、芥子、黙会草、大根草、豆腐、蕨、山椒、酢、果物、煙草、茶葉などの材料でその豊富さには驚くほどである。主食の他に素麺、餅、飴、蜜柑などが提供され、様々な酒類と茶類があった。宿舎がお寺の場合には、肉類を搬入するため特別に「黒間」⁴⁷⁾まで設けた。

この他に、朝鮮通信使を歓迎する宴会があり、また違う食材でもてなした。1711年第8回目の時の江戸までの往路には、赤間関、大阪、京都、名古屋、駿府、復路には、駿府、名古屋、京都、大阪、牛窓の五か所⁴⁸⁾で開かれた。これに使う予算は膨大になり、新井白石の改革案が提示された。

朝鮮通信使と日本の食において注目すべきなのが「さつまいも」である。1763年第10回目の通信使で参加した趙曦が対馬の「佐須浦」⁴⁹⁾でこのさつまいもに出会った。趙曦はさつまいもの救荒作物としての良さに気付き、朝鮮に持ち帰ることにした。朝鮮では実学者の丁若鏞などによって研究、改良され朝鮮の全国に広がり、飢饉を救う作物として愛されるようになる。

43) 上官は、訳官、軍官。

44) 中官は、奴婢以上。

45) 下官は、格軍以上。

46) 「五日下程」

47) 箱根の「宗安寺」

48) 1719年以降になると経費の面もあり、大阪、京都の二か所に減らされる。

49) 趙曦の『海槎日記』には「佐須浦」とあるが「佐須奈」の間違いと考えられる。

2-4. 朝鮮通信使が見た日本の街の風景と商業の発展

自然風景を堪能しながら着いた大阪はまるで別世界であった。1764年第11回目の時「三房書記」として参加した金仁謙の『日東壯遊歌』からは大阪、京都、名古屋、江戸の様子を描くことができる。

大阪については、多くの船が一斉に行き来する姿は驚くほど壮観である。昔、晋の征東將軍(の王濬が中国の益州を讃えているが、この大阪とは比肩にならない。大阪の大通りの両側には建物の軒が連なり、広い壁の上には鯨の背のような瓦に金色や赤色に塗られた巧みな装飾がある。古典に出てくる三神山の「金閣銀台」というのは正にこの地である。本願寺に通る道には民家の壁や軒が連なり、その繁盛振りは漢陽の鐘路と比べて万倍も上である。官所の建物は宏壯雄大で、我が国も宮殿よりも高く華麗である。朝鮮の家は宰相の家とも大きさは「百間」⁵⁰⁾に限るが、大阪の巨宅は「千間」にも達している。富商の邸宅は皆立派で、中には銅板敷き屋根や金で家屋の中が飾られている。一行の中には「燕京使」で北京を見た人もいたが、あの中原の壮大さと比べても劣らないと言う。申維漢の『海遊録』にも、川の水を引き運河を作り、その上のかけられた橋が200にも上る。豪族の邸宅が数百、贅沢な家が数千、また商売で富を築いた人が数千、数万である。重閣と樓閣が雲の上で光り、民家の塀や壁も奇麗で美しいのである。人が住めないところは緑の芝に覆われ、汚いところが一つもない。瓦は軽く作られ、同じ規格の障子や畳である。修繕をする時にはどこから持ってきてても大きさが同じなので合わないものがない。

1655年通信使で参加した南龍翼は、大阪の美しい姿を謳い詩として『壺谷集』に残している。その『大阪城行』を見ると、七十の虹橋の下を船が行き交い、家々の前には航路があり⁵¹⁾、大量の物を運ぶのに馬や人に頼らなくても良い⁵²⁾と書いてある。

京都は肥えた平野が千里を数える。街は大阪と比べて華麗ではないが、何かと趣がある。京都には天皇がいるが、聞くと天皇は政治には関わらず全てを閑白に任せ、宮殿の花木を管理しながら一か月の半分は「祭祀」、半分は「酒

50) 「間」は朝鮮の家の広さの度量

51) 「家家門前 要通航路」

52) 「不勞車馬」

色」に更けていると答える。

尾張名古屋もその豪華壮麗さは大阪に劣らない。人口が多く、土質は超え潤んで、家々の豪華絢爛な部屋、この道程の第一の街と言えよう。朝鮮にも三景があるが、日本の景色と比べると寂しいほどである。人々の容貌が秀麗で、特に女性が美しい。通信使が見た情女性の容貌は「明星のような瞳、紅色の砂のような唇、白玉のような歯、蚕のような眉毛、茅花のような手、蟬のような額、氷で彫ったような目」と表現し、中国の絶世の美女「楊貴妃」が見ても蒼褪めになりそうだと絶賛している。

江戸は、左には街が広がり、右には海に面している。この江戸においてはその楼閣邸宅の贅沢な造形が大阪や名古屋よりも優れている。頻繁に行き交う人々⁵³⁾、男女共華麗な服装、城郭の整然とした姿、橋や船においても大阪や京都の三倍にはなる。女性の美しさも名古屋に匹敵する。

通信使は朝鮮と比較しながら、大阪、京都、尾張名古屋、江戸の街を見て、その規模や雄壮さに圧倒されながらも嫉妬心や朝鮮の現状を嘆く場面も多く出てくる。

朝鮮通信使が見た街の中心は商業が盛んで、活発に取引が行われていた。大阪では宿舎の西本願寺に至る御堂筋の両側には多層の百家の店が並び、訪ねている人で道に溢れていた。江戸でも商店の前には長廊が付き、道は四方に通じ、平らで真っすぐに伸びている。白く塗られた楼閣、刻まれた壁の建物は三層、二層に重なり、薄い色の屋根は織られた錦のようである。このように江戸の豊かさを詩っている。

この商売を支えているのが貨幣であり、日本では乞食にも貨幣をあげていると言う。通信使一行が中山道の峠を越える時、その上で目にしたのは焼き芋の商売だった。この商業の発展には、決められた納税さえすれば、それ以外は自由に行うことができるからである。

2-5. 朝鮮通信使が見た日本の出版や印刷業の発展

朝鮮通信使に選ばれた人は文人で文化人でもあるので書籍には多くの関心があった。「申維漢」の『海遊録』には、大阪は書籍の出版や販売が活発で、

53) 江戸は1603年徳川家康によって開かれ、1733年には人口が100万人を超え世界最大の都市になる。

多くの書店があり壮観であるとしている。また、申維漢は、“日本人は沢山の本を出版し、本をよく読んでいる”と評している。これらの書店には古今の書籍をすべて揃えており、中国や朝鮮の書籍もないものがないくらいである。古今の異書や百家の文集を出版した量は、朝鮮の10倍には達すると見ている。日本で流通している本は、朝鮮のものが100だとすると中国のものは1000に上り、中国の南京から仕入れている。

朝鮮の書籍の中には「退溪集」に対する関心が高く、退溪についても申維漢に“「陶山書院⁵⁴⁾」の所在地はどここの郡に属しているのか”、“退溪の子孫は何人位いて、何の官職についているのか”、“退溪は生前何が好きだったか”などなどあまりにも質問が多く、それを書くには足りなかったと記している。

彼らと話すときと聡明で流暢な話しぶり、また筆談では「奇言美談」をよく引用する。故事を論じて評するのに的確な所見を下している。まるで書物を食べた「紙魚」のようである。

また、この書籍中には朝鮮でも貴重なものばかりが含まれている。例えば、朝鮮通信使の見聞録である『海遊録』や柳成龍が書いた『懲毖録⁵⁵⁾』、姜沆の『看羊録』などが日本で出版され多くの人に読まれているのを見て、朝鮮の国家機密がこのように漏洩しているのを心配している。

このような本の普及により、日本人が文廟に祭られている賢人の名前を殆ど覚えている。筆談を交わすと新羅時代の名文人「崔致遠⁵⁶⁾」から「薛聰⁵⁷⁾」、「金長生⁵⁸⁾」まで有名な先人を知らない人がいないほどだった。

また、出版の速さについても驚いている。朝鮮通信使が江戸に行く途中書いてあげた詩文が、帰路時に見たらもう出版されて書店で売られているのを見て驚愕している。このように朝鮮通信使と日本の各専門家が交流した内容は直ちに出版され、本屋を通して広く一般の人の手に渡っていた。また、出版された本の中には日韓医学交流による医学書も多く含まれている。1719年第9回朝鮮通信使の時には、藍島で⁵⁹⁾ 朝鮮の良医「権道」と日本の医者「小野

54) 世界文化遺産に登録されている。李退溪死後、弟子達によって建てられた。慶尚北道安東市にある。

55) 豊臣秀吉による朝鮮出兵時の1592年から1598年までの体験を手記で書いた本。

56) 新羅末の文人（858年～？）。

57) 7世紀後半から8世紀前半頃の新羅の儒学者（生没年不詳）。

58) 朝鮮時代の学者（1548－1631）。

59) 権道は藍島で暴風に会い、長く滞在することができた。

士厚」との医学問答が翌年出版されている。このように出版された本が200冊にも上ると言う。日本では朝鮮では医学書の集大成と言われている『東医宝鑑』⁶⁰⁾も二回発行され、『医方類聚』(365冊)も出版された。この他にも「宇多田秀家」が朝鮮から持ち帰った医書54種138冊も刊行されている。朝鮮通信使が見た日本は出版が盛んになり、多くの人が書店を訪れ知識を得ていた。

2-6. 朝鮮通信使が見た日本の雅楽と宮中音楽

朝鮮通信使が日本の伝統芸能や音楽に接する機会は殆どなかったが、最大重要な将軍に国書伝達の儀式を終え朝鮮への帰路に就く前に前に一番盛大な「上馬宴」が開かれる。上馬宴)とは馬に乗る前に開かれる宴という意味である。この上馬宴では、今までどこでも見たことのない「雅楽」を鑑賞する機会に恵まれる。通信使の中には、雅楽を朝鮮から日本に伝えたという優越感があったが、まさか日本でその雅楽を聞くとはい夢にも思わなかった。この雅楽は中国から伝わった「唐楽」と朝鮮から伝来した「高麗楽」の二つの流れがあり、平安時代に日本の要素を加味して発展したと考えられる。この雅楽は、それぞれ学期の編成、音楽構成の内容によって「管絃」と「舞楽」の二種類が今に伝わっている。

この中の「舞楽」に関する感想の記録が、1711年通信使の任守幹が記した『東槎日記』に詳しく紹介されている⁶¹⁾。この上馬宴では、今にも伝わる24曲の高麗楽の中で、「長保楽」、「仁和楽」、「古鳥蘇」、「林歌」、「納曾利」の五曲が披露された。この高麗楽はすべて舞楽で、演奏に踊りが伴う。

この日の上馬宴で⁶²⁾披露した音楽は13曲あったが、その4番目、6番目、8番目、10番目、12番目がこの高麗楽だった。この中の6番目の「仁和楽」は、青い服を着た4人の踊り手が花と貂尾を付けての踊りは余裕があり音調が安らかであると描いている。8番目の「古鳥蘇」は、「蘇花冠」を被って、「雑録衣」の青い服の裾を引きずりながら、刀を帯び、背中には「笏」を挿した四人の踊り手が登場する。二人が先に下がり、ハエたたきのような「拂子」を持っ

60) 1610年、許浚が編纂した韓方醫書、25巻 25冊

61) 舞台の規模や大きさ、舞台飾り、楽器の配置、演奏者や踊り手の服装、公演の順序など精密に記述して、まるで現場にいるような感覚を与える。

62) 1711年江戸城の内殿で開かれた。

て来ると二人がこれを引き受けて踊る。10番目の「林歌」では、薄い緑色の複には黄色と白のネズミのような模様の刺繍が施されている。着物の裾が長く⁶³⁾、頭には「鳳冠」を被った四人が踊る。12番目の「納曾利」は、踊り手の二人が「青木假面」を被っている。面は奥歯がとても長く、瞳が飛び出ている。口は大きく開けて、彩色で縫い取った青い鎧には青い絹糸で束を巻いた。そして「簫」を握って踊る。この記録は、今の宮中音楽と殆ど同じで正確で詳細に記したことが分かる。しかし、任守幹は客観的な記述だけで、個人的な感想は言及していない。この上馬宴で演奏した人の中には百済の子孫が入っていると書いてあるが、それに関する感情も表していないのも興味深い。

2-7. 朝鮮通信使が見た日本人の秩序との質素な生活

朝鮮通信使が移動する時もその一行は煩く、自分勝手に動く人もいたが、日本人は規律を厳格に守り整然とした動きであった。しかし、休む時間には職位による上下の区別もなく自由な関係であった。朝鮮通信使の随行員は煙草を吸う時にも上官に煙がいかないように注意したが、日本人の方は上下交ざって煙草を吸い、身分に関わりなく笑いながら話を交わしていた。しかし、道に出ると秩序が戻り、整然とした隊列を成していた。これは道端の見物客も同じで、背が小さい人は一番前の列に座り、少し大きい人は二列目に、もっと大きい人は三列目で、煩く喋る人も皆無であった。朝鮮通信使の数千里の道程で、道を遮る人は一人もいなかった。

また、生活においては皆質素で、通信使と同行する官吏でも自分のお弁当を持参し、各藩から接待されることもなかった。着る服も二三程で頭には冠や帽子もなく、靴にも綿のようなものを履かないのである。釜や鍋野のようなものは軽くて薄く精巧に作られている。これには薪の量が少なくてもご飯や汁物を煮ることができる。家にはオンドルがないので木を燃やす必要もない。生活がこうなので一人一日の暮らして二三両あれば充分である。

申維漢は将軍についても、その質素さを次のように記している。吉宗は武芸を奨励し、自らは狩りを好む。狩りは酒色に陥るより健康のためにも増しである。吉宗は国書奉呈式においても家老と同じ冠で、同じ服装であった。

63) 現在の複はそれより短くなっている。

2-8. 朝鮮通信使が見た日本の遊郭文化と性風俗

大阪は商業で繁盛している街なので遊郭も多い。1719年、第9回目の通信使で製述官として参加した申維漢はその年の9月5日、大阪の「新町」⁶⁴⁾の遊郭に行く。日本には朝鮮のように「妓生」⁶⁵⁾がなく、その代わりに都市の大きい客店には「娼楼」があると言われる。

遊郭の中に入ると屏風や酒瓶、茶道具があり、刺繍を施した錦で、金銀で彫られている。そこにはそれぞれ美人一人を置き、「上上娼楼」という額がかけられている。ここにお金を持った遊客が来る。上上娼楼には一日白金十両、中や下にはそれより差がある。

日本では「女色」より「男色」⁶⁶⁾の方がもっと流行っている。年は十四五才の美童に髪の毛には油を塗り、頭の両側に角のように作り、化粧やアクセサリを付け錦の着物で身を包む。申維漢は、雨森芳洲に男と男が恋愛するのは陰陽の理に反するのではないかと質問したら、雨森芳洲は「あなたはその「男男の妙理」が分からないからだ」と返ってくる。雨森芳洲が歌った詩で、「左には赤いチマ⁶⁷⁾、右には美童のチョンガ」と裕福な人の贅沢だと教える。この美童は出かける時にも一緒にし、嫉妬心から殺人事件まであったという。

結婚する時には姓氏が同じでも避けない。いところ同士でも結婚が許される。義理の兄弟でも寡婦になった時には妻として迎え入れることができる。しかし、“日本には朝鮮のように「官妓」⁶⁸⁾制度がないので、彼女達に歌わせたり、踊らせたりすることはない”と言っている。日本にはどの家においても風呂があり、男女一緒に入る風習もある。

2-9. 朝鮮通信使が見た日本の身分制度

当時朝鮮は儒教が社会を支配し、「士農工商」の厳格な身分社会を維持していたが、朝鮮通信使は日本を「兵農工商」の社会と見て、その中で「兵」が一番だという。朝鮮通信使に選ばれた人は難しい科挙の試験を突破した秀才

64) 大阪の新町は、京都の島原、江戸の吉原と共に日本三大遊郭の一つと言われた。

65) 「芸妓」のこと。

66) 第三代将軍「徳川家光」が男色を好むことから始まったという説もある。17世紀中盤に一時禁止になったが、この時代にまた再燃したようである。

67) スカート

68) 当時朝鮮では「官妓」という奴婢制度があった。

で、学者であり、官吏になると政治家にもなる。それがまた外交官にもなる。朝鮮の士農工商は、その頂点に学者がいるのである。日本には「士」の階級が存在しないことに驚く。あるいは「士」は一番下の階級に当たる。

日本は「兵農工商」で「兵」がその頂点に立つが、それ以外は割と平等である。「兵」が上にあるのは、生活が楽だからである。兵一人に年間25石を与え、訓練以外は課せられることはない。商は、財物は多いが税が重い。「工」は匠の技術で精巧なものを作り出すが、その匠の技に比べると値段が安い。この他に「医」があり、医者は人の命を救うので、その功労がるので一番に数えられる。このようにそれぞれ役割はあるが、決められた税金さえ払えればそれ以外の負担はなく、それが社会の平安を維持する手段である。その上に勇敢な兵と優秀な銃剣が国の下支えである。

3. 終わりに

朝鮮通信使が日本に来て何を見て、何を感じたのか。釜山から対馬までは目と鼻の先であるが、天候によっては海が荒れ、暴風に会い死を覚悟した⁶⁹⁾ 険しい道程でもあった。このように孤軍奮闘して目にした日本の第一印象は、町が奇麗で、規律を良く守る人々であった。埃一つ落ちていない町を通信使は「一村精麗」（小さい町も精麗に奇麗だ）と感想を記している⁷⁰⁾。朝鮮通信使が見た沿道の人々を、「小さい人は列の一番前に座り、その次の人は二列目、大きい人は三列目で、皆お喋りも慎み静粛に見ている。また、一行の行列に割り込み遮る人もいない」と記しており、まるで現在の日本の風景を見ているような気がする。これに対して朝鮮から来た人は右往左往、大きい声で勝手に喋り、通信使の一人は恥ずかしかったと漏らしている。

この通信使は外交使節としての来日であるが、長い期間日本の各地を周る旅人でもあった。通信使の代表は文人であり、文人は自然を楽しみ、それを詩で表すのが自慢である。外交使節としての忙しい日程の中でも各地の名勝を堪能し詩や書を残しているのは、自分達は中国の嫡子の存在で、朝鮮の文化的優越性を表す絶好の機会でもあったからである。対馬から瀬戸内海を通っ

69) 遺書を残す人までいるほどだった。

70) 今も多くの韓国人が日本に来ると同じ感想を言っている。

て日光までの優れた景色に感動した。中でも「琵琶湖」と「富士山」は楽しみめではあったが、中には自尊心から富士山より朝鮮の金剛山が勝っていると対決を仕掛ける人もいた。この対決は自然においてまで文化的優越性を表す過度な反応でもあった。

日本に來た通信使は日本の歳時風速にも強い関心があったが、その記録は旅人としての限界と短編的な体験から正確性を欠けているところも随所に見られる。また見たことに対しても興味が無いものは記録に見られない。お正月の飾りについては比較的繊細的に記述しているが、その過ごし方について誤解している部分も多い。お盆と夏の水祭りについては朝鮮の文化と違い、割と詳細に興味を示している。

食については、それほど不便は感じなかったようだが、その中でも民家の鶏を盗みに入る場面⁷¹⁾は滑稽な感がある。また、米の支給は余る程であり、余った米を換金して「銀子」であげたが、朝鮮通信使は帰る途中の川⁷²⁾に投げ捨てたという。

朝鮮通信使が見た日本の街の発展や清潔さには驚いた。日本に來る前まではこれほど発展しているとは思わなかった通信使は、大阪の城や街並みを見て中国の伝説に出てくる楽園がこれだと思った。京都、尾張名古屋、江戸も同じで奇麗で雄大な姿、店には品物が山のように積まれ、家には米が余る程ある。この豊かさを支えているのが商業であり、その根底には貨幣経済があった。当時朝鮮でも「常平通宝」という銅銭があったが、一般的には米や布が交換手段の主流であった。各都市で会った人々についてはとても好感があった。男性の容貌は秀麗で、女性は美しく愛嬌がある。化粧をしても肌が白く自然な感じがする。手には可愛い手拭いを持ち、声や笑いが朗々として清い。「紅粉傾城香風襲人」と女性の香りが風に乗って襲って来るようだと感じている。大阪では「不雨張傘為遮曝陽」と「日傘」をさしている女性を見ている。このように開放的⁷³⁾で美しい女性の描写が多いのは、当時朝鮮の社会では家族以外の女性に接する機会が殆どなかったからだと思われる。しかし、日本

71) 「朝鮮聘礼使淀城着來図」の中にある。

72) 浜名湖近くの「今切川」で通信使はこの事件以降この川を「金絶河」と呼んだという。朝鮮語で「今」と「金」は同音。1636年。1747年通信使画員がこれを題材とした絵を描いている。

73) 街でも男女自由に話しを交わし、人の前でも女性の顔を触っている。外国人も手を振り親密感を表している。これらは儒教社会の朝鮮では想像も出来ないことであった。

の遊郭や性風俗については儒教的価値観から痛烈に批判している。

印刷や出版業の発展も目を見張るものであった、書店に並んでいる数々の本、それを読んだ人々の博識に驚き、朝鮮の先人達の名前や歴史に精通しているのを見て、国家機密が丸見えだと危惧している。

朝鮮通信使を驚かせたものの一つが「上馬宴」での雅楽の公演であった、雅楽については朝鮮側から教えたという自負心があったのに、朝鮮では伝統継承が薄れていたこの芸術が、日本では盛大に公演されているのを見て驚きと寂しさが交錯した。

日本の身分制度にも驚いた。朝鮮の「士農工商」に対して、日本は「兵農工商」である。「兵」が一番頂点に立つが、それ以外は皆平等である。例えば、仕事の上では厳格な上下の秩序があるが、休む時には地位に関わりなく自由である。朝鮮のように学者が優遇されないことには怒りも感じる。日本には「科挙制度」がないので学者は出世することが出来なく、藩士の下について飯を食うことになる。

朝鮮通信使は日本に来て日本の自然から風習や生活まで沢山のことを見物し、色々な人と交流を深めた。初めて目にした日本の自然は美しく、巨大な街の発展や繁栄は目覚ましく人々の暮らしは潤んで見えた。朝鮮との比較で嘆き、嫉妬心にも沸いた。このような嫉妬心は文化的、道徳的優越性を固執したいという気持ちにもなる。日本に対して肯定的な面がある反面、歴史的な怨恨から否定的・批判的な見解も多く見られる。これは日本と朝鮮との永遠な宿命的立場にもなる。

朝鮮通信使に参加した人達は、様々な日本を見て、日本人との多方面における交流が行われた。この中で、今までの中国一辺倒の世界観から国際情勢に対する新しい価値観が生まれた。通信使達は最初、「漢詩唱和」を通して自分達（朝鮮）の文化的優越性を遺憾なく発揮し、日本人を劣等感に陥れると目論んでいた。しかし、日本の文人等の交流を通して自分達の歴史認識の無頓着と世界情勢の無知を露呈するだけだった。日本人を倭人、禽獣と蔑視しようとした意図は過去志向的で、非生産的な論争に過ぎないことにも気付いた。経済や身分制度のみならず民俗風習や性風俗に至るまで現実認識の多様性の時代を痛感した。このような通信使の公的であり私的な体験は、朝鮮と日本は最も友好的でなければならないという認識の開眼に至った。

参考文献

- 『江戸時代の朝鮮通信使』 李 進熙1992 講談社
 『海遊録』 申 維翰（姜在彦訳） 1974 平凡社
 『近世日本人は朝鮮をどうみていたか』 倉知 克直 2001 角川書店
 『近世日本と朝鮮漂流民』 池内 敏 1999 臨川書店
 『国史大辞典』 11 国史大辞典編集委員会編 1990 吉川弘文館
 『国史大辞典』 13 国史大辞典編集委員会編 1992 吉川弘文館
 『古代朝鮮』 2004 講談社〈講談社学術文庫〉
 『朝鮮通信使と日本人』 李 元植他 1992 学生社
 『朝鮮通信使－人の往来，文化の交流』 辛 基秀 1993 明石書店
 『朝鮮通信使に奇跡－増補・前近代の日本と朝鮮』 中尾 宏 1993 明石書店
 『朝鮮通信使－江戸日本の誠心外交』 中尾 宏 2007 岩波新書
 『朝鮮の歴史 先史から現代』 田中俊明編 2008 昭和堂
 『日東壯遊歌』 金 仁謙（高島淑郎訳） 1999 平凡社
 『漂流記録と漂流体験』 倉知 克直 2005 思文閣出版
 『日東壯遊歌』 金 仁謙（高島淑郎訳） 1999 平凡社
 『李朝の通信使－江戸時代の日本と朝鮮』 李 進熙 1986 講談社
 『わが町にきた朝鮮通信使Ⅰ』 辛 基秀 1999 明石書店
 『海遊録』 申 維翰（姜在彦訳） 1974 平凡社
 『日東壯遊歌』 金 仁謙（高島淑郎訳） 1999 平凡社
 『朝鮮通信使－江戸日本の誠心外交』 中尾 宏 2007 岩波新書
 『朝鮮通信使に奇跡－増補・前近代の日本と朝鮮』 中尾 宏 1993 明石書店
 『近世日本人は朝鮮をどうみていたか』 倉知 克直 2001 角川書店
 『江戸時代の朝鮮通信使』 李 進熙1992 講談社
 『李朝の通信使－江戸時代の日本と朝鮮』 李 進熙 1986 講談社
 『わが町にきた朝鮮通信使Ⅰ』 辛 基秀 1999 明石書店
 『朝鮮通信使－人の往来，文化の交流』 辛 基秀 1993 明石書店
 『朝鮮通信使と日本人』 李 元植他 1992 学生社
 『わが町にきた朝鮮通信使Ⅰ』 辛 基秀 1999 明石書店